

Yvonne Jewkes, 2015, *Media & Crime 3rd Edition*, Sage.

井 村 柊 子

犯罪とテレビや新聞などのメディアは密接に関係している。犯罪が世間に公表され、大衆はメディアによってその情報を受け取ることがほとんどであるからだ。また、犯罪報道は様々な要因や考えを通して作られるため、意識的にしろ無意識にしろ、事件のそのままの形で報道されることは少なく、偏った解釈を生みやすい。

日本において、メディアと犯罪の関係性をテーマに書かれた本は少ない。そのため、イギリスの大学教員によって書かれた本書を取り上げる。本書は専門書というよりは、入門書やテキストブックである。そのため複数の小テーマから成り立っており、様々な観点からメディアと犯罪の関係性を見ることができる。

著者はイボンヌ・ジュークス氏である。ジュークス氏は犯罪社会学を専攻しており、2007年から2015年までイギリスのレスター大学で教鞭をとっていた。また、2016年からはイギリスのブライトン大学に所属している。

本書は10章から構成されている。1章はアノミーやポストモダニズムといったメディアや犯罪においてこれまでに提唱されてきた学説を解説し、新しい学説の分析も行っている。2章は、観衆の反応などニュースが制作される上で重要な価値観の概要やこれまで報道価値があるとされてきた典型的な形の研究について述べられている。3章では、メディアでは報道されるにあたって誤解されて使われているモラルパニックの概念を再確認するとともに、モラルパニック

の5つの特徴を考察している。また、小児性愛を例にモラルパニックを解説している。4章では、メディアにおける「子ども」を「凶悪な怪物」と「悲惨な被害者」という両面から考察している。しかし、どちらにしても子どもに関する犯罪報道は世間からは注目を浴びやすいと述べている。5章では、メディアにおけるジェンダー論、特に女性に対するある種の差別的な報道の仕方について述べている。女性を「凶悪なもの」としたり、異質なものとして報道することで男性との差を強調しており、その原因についても考察している。6章では、犯罪報道の「登場人物」である警察と加害者と被害者の描かれ方についてイギリスで放送されている実際の報道番組やテレビ番組をもとに分析し解説している。また、メディアと大衆が犯罪に対して抱える不安についての可能性についても述べている。7章では、犯罪映画や刑務所の中を舞台にした映画から、大衆の犯罪と正義や法に対する考え方や態度を分析し解説している。また、どのような形で男らしさを描いているか、どのようなテーマで作られているかという観点から分析も行っている。8章は、フーコーのパノプティコンとその後生まれたシノプティコンから、監視社会の概念を再確認し、映画や音楽や芸術などといった文化的なものや新しいメディアから現代の監視社会のあり方を考察している。9章では、インターネットの登場によって犯罪や逸脱行為に見られるようになった変化とニュースで

のインターネットの扱い方や語られ方についての分析している。また、若者世代にとっての犯罪や逸脱行為のきっかけとしてのインターネットについても述べている。10章では、本書の中でこれまで述べてきた概念や分析や考察から現代におけるメディアと犯罪の関係性についてまとめている。

本書は、既存の犯罪社会学の学説やこれまで比較的盛んに行われてきたモラルパニックや女性や子どもとメディアの議論の他に、映画などの文化と新しいメディアであるインターネットとメディアの関係についても論じている。犯罪社会学的観点から考察するのではなく、文化社会学的観点や情報社会学的観点も加えてメディアのあり方を考察するという姿勢が見られた。

日本においてメディアと犯罪について論じられているものは、主にニュースや新聞で事件がどう取り上げられたか、どのような報道をされたか、ニュースの中で「犯罪」はどんな構造をしているのかという観点で、ニュースでの犯罪を分析したものが多い。本書では“news values”や“newsworthiness”といった言葉が多く見られる。日本においてもその事件や出来事に報道価値があるかどうか大きなファクターとなり、ニュース制作に影響を与えている

という研究がなされている。一方で、本書の6章・7章のように、実際の映画やテレビ番組を用いて、大衆が犯罪や正義についてどのように感じ考えているのかという観点からの犯罪社会学的研究はあまり見られない。メディアは新聞やニュースだけではない。映画やテレビ番組などもそうである。日本には映画やテレビ番組の他に漫画やアニメといった文化が発展している。そういったものを通して日本の大衆が犯罪をどのように考えているのかを研究するのも面白いのではないだろうか。

冒頭にも書いたが、本書は入門書・テキストブックである。そのため、極端に偏った解説がされることはなく、海外の主な「メディアと犯罪」の研究トピックスが満遍なく書かれている。それゆえ、日本での「メディアと犯罪」における研究課題が見えてきたように感じる。

メディアと犯罪の研究の取っ掛かりとしてだけでなく、海外のメディアと犯罪の関係性を知ることができた一冊であった。

(いむら とうこ

社会学部現代社会学科4回生)

推薦教員：山本 奈生